確率論, 舟木直久[1] 読書記録

最終更新: 2022年10月18日

<u>注意</u>: 記述の正確性は保証しません. ややこしいことになりたくないので, 本文の引用は最小限にしています. ? マークは不明/自信なし/要復習を意味しています.

誤植と思われるもの (2019/7/25 初版第14刷)

頁	行	誤	正
141	10	$(\Omega = S^n, \mathcal{F}, P)$	$\Omega = (S^n, \mathcal{F}, P)$
239	-3	定理 A.5	定義 A.5

- **■42,5(\Omega_0 \in \mathcal{F} がなりたつこと)** Ito[2], p.65, 定理 10.2 より.
- ■42,6 (\tilde{X} が確率変数であること) $\{\tilde{X} \leq a\} \in \mathcal{F}$ をいえばよい.

$$\begin{split} \{\tilde{X} \leq a\} &= \left(\{\tilde{X} \leq a\} \cap \Omega_0 \right) \cup \left(\{\tilde{X} \leq a\} \cap \Omega_0^c \right) \\ &= \begin{cases} \left(\{\lim_n X_n \leq a\} \cap \Omega_0 \right) \cup \Omega_0^c & a \geq 0 \\ \left(\{\lim_n X_n \leq a\} \cap \Omega_0 \right) \cup \varnothing & a < 0 \end{cases} \end{split}$$

と変形できるが、 $\{\lim_n X_n \leq a\} \in \mathcal{F}$ 、 $\Omega_0 \in \mathcal{F}$ であるから a によらず $\{\tilde{X} \leq a\} \in \mathcal{F}$ である. ゆえに \tilde{X} は確率変数.

■45,13 $(x = \pm n \text{ として } n \to \infty \text{ とすればよいこと})$ 有界単調数列が収束することと、収束列の部分列はもとの列と同じ極限をもつことによる.

46,-6

- $F(x) < w \implies x < Y(w)$: $F(x) < w \implies x \le \sup\{y \in \mathbb{R} \mid F(y) < w\}$ である. x = Y(w) と仮定すると、 $\forall y > x$, $F(y) \ge w$ がなりたつが, F の右連続性より $F(x) = \lim_{y \to x+} F(y) \ge w$ となり矛盾.
- $x < Y(w) \implies F(x) < w$: 明らか. $x < Y(w) = \sup\{y \in \mathbb{R} \mid F(y) < w\} \implies F(x) < w$.

■46,11 **(関数** *Y*(*w*)**)** 関数 *Y*(*w*) の例.

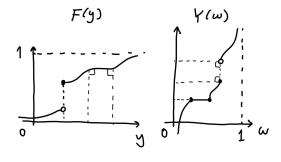


図 1 関数 Y(w).

■46,-4 $\forall x \in \mathbb{R}, \{w : Y(w) \le x\} = \{w; w \le F(x)\} = (0, F(x)] \in \mathcal{B}((0, 1))$ ゆえ Y は可測.

- **■47.2** $\mu((-\infty,x]) = m(Y \le x) = m((0,F(x)]) = F(x)$. 2つ目の等号で (2.3) を用いた.
- ■47,8 (X と Y の分布が一致すること) 47,2 より任意の $x \in \mathbb{R}$ に対し, $m_Y((\infty,x]) = F(x) = P_X((-\infty,x])$ がなりたつ. π - λ 定理より $m_Y = P_X$.
- ■48,4 (絶対連続, 特異) Ito[2], p.130, 18 章.
- **■**61,-2 $(X_{1,1}, X_{2,1}, X_{2,2}, \dots$ が)
 - p 次平均収束すること: $E[|X_{n,k}|^p] = E[X_{n,k}] = \frac{1}{n}$ ゆえ $\lim E[|X_{n,k}|^p] = 0$ となる.
 - 概収束しないこと: $X_{n,k}$ の定義より, 任意の $w \in (0,1)$ に対し, 任意の n について k が存在して $X_{n,k}(w) = 1$ となるから, $\{w \in (0,1); \lim X_{n,k}(w) = 0\} = \emptyset$. ゆえに $P(\lim X_{n,k} = 0) = 0 \neq 1$.
- **1**62,2 $(X_n(w) = n1_{(0,\frac{1}{n})}(w)$)
 - 概収束すること: 任意の $w\in (0,1)$ をとる. $N\geq \frac{1}{w}$ なる自然数 N をとれば, $n\geq N$ で $X_n(w)=0$ となる. ゆえに $\lim X_n(w)=0$. w は任意だったから $P(\lim X_n=0)=1$.
 - p 次平均収束しないこと: $E[|X_n|^p] = \int_0^{\frac{1}{n}} n^p dw = n^{p-1}$ だから $\lim E[|X_n|^p] \neq 0$.
- ■68,1 $((X_n X)_{n \in \mathbb{N}})$ が一様可積分であること) 補題 2.55(1)(2) の条件をみたすことを確かめる.
 - 1. $(X_n)_{n\in\mathbb{N}}$ が補題 2.55(1) をみたすことと X が可積分であることより, $\sup_n E[|X_n-X|] \leq \sup_n E[|X_n|] + E[|X|] < \infty$.
 - 2. $\sup_n E[|X_n-X|,A] \leq \sup_n E[|X_n|,A] + E[|X|,A]$ に注意. 任意の $\epsilon>0$ に対し, $A\in\mathcal{F}$ が $P(A)<\delta$ を みたすなら $\sup_n E[|X_n|,A] < \epsilon/2$ かつ $E[|X|,A] < \epsilon/2$ となるような δ を選ぶ*1. このとき $\sup_n E[|X_n-X|,A] < \epsilon/2 + \epsilon/2 = \epsilon$.
- **■69,14 (** $||X_n| |X|| \le |X_n X|$ **)** 一般の $a, b \in \mathbb{R}$ について $ab \le |a||b| \implies |a|^2 2|a||b| + |b|^2 \le |a|^2 2ab + |b|^2 \implies ||a| |b||^2 \le |a b|^2$ であるから.
- **■69,-5 (条件** $P(|X| = \lambda) = 0$ **について)** たとえば $(|X_n|)_{n \in \mathbb{N}}$ が単調増加のとき, $|X| = \lambda$ となる w で

$$|X_n| \cdot 1_{\{|X_n| < \lambda\}}(w) \to \lambda \neq 0 = |X| \cdot 1_{\{|X| < \lambda\}}(w) \tag{1}$$

となるおそれがあるが, $P(|X|=\lambda)=0$ なら概収束 $|X_n|\cdot 1_{\{|X_n|<\lambda\}}\to |X|\cdot 1_{\{|X|<\lambda\}}$ a.s. に関与しない(ので安心).

- **■70,5** $P(|X| = \lambda) > 0$ なる λ が高々可算個しかないから、この後で十分大かつ $P(|X| = \lambda) = 0$ なる λ を選ぶことができている.
- ■70,10 (このことから…) 各 $m=1,2,\ldots,n_0-1$ についてそれぞれ $E[|X_m|,|X_m|\geq \lambda_m]<2\epsilon$ をみたす λ_m を選んでおく. $\lambda_0:=\max\{\lambda_1,\ldots,\lambda_{n_0-1},\lambda\}$ とおけば任意の $\lambda\geq \lambda_0$ で $\sup_n E[|X_n|,|X_n|\geq \lambda]<2\epsilon$ がなりたつ. よって $(X_n)_{n\in\mathbb{N}}$ は一様可積分.

 $^{^{*1}}$ このような δ は $(X_n)_{n\in\mathbb{N}}$ が補題 2.55(2) をみたすことと, X が可積分であることより存在する.

■80,-5 (単調収束定理を用いる. について)

$$\begin{split} E[X] &= E[\lim_N (X_1^{(N)} \cdots X_n^{(N)})] \\ &= \lim_N E[X_1^{(N)} \cdots X_n^{(N)}] \quad \text{単調収束定理.} \\ &= \lim_N (E[X_1^{(N)}] \cdots E[X_n^{(N)}]) \\ &= \left(\lim_N E[X_1^{(N)}]\right) \cdots \left(\lim_N E[X_n^{(N)}]\right) \quad (X_k)_{1 \leq k \leq n} \text{可積分.} \\ &= E[X_1] \cdots E[X_n] \quad \text{単調収束定理.} \end{split}$$

■83,7 (補題 3.20)

- 原材料: n 個の確率空間 $(S_k, \mathcal{S}_k, \mu_k)$, $1 \leq k \leq n$ と n 個の確率変数 $X^{(k)}: S_k \to \mathbb{R}$, $1 \leq k \leq n$.
- 構成物: $\underline{1}$ 個の確率空間 $(\prod_k S_k, \mathcal{S}_1 \times \cdots \times \mathcal{S}_n, \mu_1 \times \cdots \times \mu_n)$ と \underline{n} 個の確率変数 $X_k : \prod_k S_k \to \mathbb{R}, 1 \le k \le n$.

$$P(X_1 \in B_1, \dots, X_n \in B_n) = P(X_1^{-1}(B_1) \times \dots \times X_n^{-1}(B_n))$$
 X_k の定義.
$$= \prod_k \mu_k(X_k^{-1}(B_k)) \quad 直積測度の定義.$$

$$= \prod_k P(X_k \in B_k).$$

■91,-10 ((1) 証明)

$$E[Z,B] = aE[E[X|\mathcal{G}],B] + bE[E[Y|\mathcal{G}],B]$$

= $aE[X,B] + bE[Y,B] \quad E[X|\mathcal{G}], E[Y|\mathcal{G}]$ の定義.
= $E[aX + bY,B]$.

■91,-7($Z \geq 0, a.s.$ であること) $Z \geq 0, a.s.$ でないとすると, $A \in \mathcal{F}$ があって $P(A) > 0, \omega \in A \implies Z(\omega) < 0$ がなりたつ. Z が G-可測なので(適当に A を広げることで) $A \in \mathcal{G}$ となるように取り直せる. すると E[Z,A] < 0 となり矛盾.

■94,11 (コルモゴロフの 0-1 法則の証明)

- $n \in \mathbb{N}$ に対し 1_A と \mathcal{F}_n が独立であること:
- P が π-系であること:
 - 1. $\Omega \in \mathcal{F}_1$ ゆえ $\Omega \in \mathcal{P}$.
 - 2. $A, B \in \mathcal{P}$ とする. \mathcal{F}_k は単調増加だからある n が存在して $A \in \mathcal{F}_n, B \in \mathcal{F}_n$. ゆえに $A \cap B \in \mathcal{P}$.
- ℒが λ-系であること:

 - $2. \ A, B \in \mathcal{L}$ で $A \subset B$ とする. $C \in \mathcal{T}$ に対し, $E[1_C, B \setminus A] = E[1_C, B] E[1_C, A] = P(C)P(B) P(C)P(A) = P(C)P(B \setminus A)$.
 - $3. \ A_n \in \mathcal{L} \nearrow A$ とする. $C \in \mathcal{T}$ に対し、 $E[1_C, A] = E[1_{A \cap C}] = E[\lim_n 1_{A_n \cap C}] = \lim_n E[1_{A_n \cap C}] = \lim_n E[1_C, A_n] = \lim_n P(C)P(A_n) = P(C)\lim_n E[1_A] = P(C)P(A)$. 3 番目と 7 番目の等号で単調収束定理を用いた。ゆえに $A \in \mathcal{L}$.
- π-λ 定理の適用:

第 1 段より $\mathcal{P} \subset \mathcal{L}$. よって π - λ 定理が適用できて $\sigma(\mathcal{P}) \subset \mathcal{L}$.

• $\sigma(\mathcal{P}) = \mathcal{F}_n$ であること:

$$\sigma(\mathcal{P}) = \sigma(\bigcup_{n=1}^{\infty} \mathcal{F}_n) = \sigma(\bigcup_{n=1}^{\infty} \sigma(\bigcup_{i=1}^{n} \mathcal{B}_i)) = \sigma(\bigcup_{i=1}^{n} \mathcal{B}_i) = \mathcal{F}_{\infty}.$$

3番目の等号は非自明.

- ⊂:

$$\forall n \in \mathbb{N}, \ \sigma(\cup_{j=1}^n \mathcal{B}_j) \subset \sigma(\cup_{j=1}^\infty \mathcal{B}_j) \implies \cup_{n=1}^\infty \sigma(\cup_{j=1}^n \mathcal{B}_j) \subset \sigma(\cup_{j=1}^\infty \mathcal{B}_j)$$

$$\implies \sigma(\cup_{n=1}^n \sigma(\cup_{j=1}^n \mathcal{B}_j)) \subset \sigma(\cup_{j=1}^\infty \mathcal{B}_j). \quad \sigma \mathcal{O}$$
定義

 $- \supset: \cup_{j=1}^{\infty} \mathcal{B}_j \subset \cup_{n=1}^{\infty} \sigma(\cup_{j=1}^n \mathcal{B}_j)$ よりわかる.

• B = A とできること:

 $A \in \mathcal{F}_{\infty}$ つまり $\mathcal{T} \subset \mathcal{F}_{\infty}$ をいえば, (3.9) に $A \in \mathcal{T}$ を代入することが可能. 実際, 任意の k に対し

$$\mathcal{T} = \bigcap_{k=1}^{\infty} \mathcal{G}_k \subset \mathcal{G}_k = \sigma\left(\cup_{j=k}^{\infty} \mathcal{B}_j\right) \subset \sigma\left(\cup_{j=1}^{\infty} \mathcal{B}_j\right) = \mathcal{F}_{\infty}$$

であるからよい.

■補足(末尾加法族の典型例) 各 σ -field が確率変数から生成されている($\mathcal{F}_n = \sigma(X_n)$)とき、

$$\mathcal{T} = \{\omega \in \Omega; \lim_{n \to \infty} X_n(\omega)$$
が存在する \}

のような、 $\{X_n\}$ の無限の彼方の性質で決まるような事象は末尾加法族の要素.

■122.-1 (Helly の選出定理)

- $\{n_k^{(j)}\}_{k=1,2,\dots}$ がとれることと $\tilde{F}(y)$ の構成: 有界実数列は収束部分列をもつ(Bolzano-Weierstrass の定理)ことより,有界実数列 $F_1(y_1),F_2(y_1),\dots$ の収束部分列 $F_{n_1^{(1)}}(y_1),F_{n_2^{(1)}}(y_1),\dots$ がとれる.この部分列の極限を $\tilde{F}(y_1)$ と定義する.次に,有界実数列 $F_{n_1^{(1)}}(y_2),F_{n_2^{(1)}}(y_2),\dots$ の収束部分列 $F_{n_1^{(2)}}(y_2),F_{n_2^{(2)}}(y_2),\dots$ をとる.この部分列の極限を $\tilde{F}(y_2)$ と定義する.以上を繰り返して, $y\in\mathbb{Q}$ について定義された関数 $\tilde{F}(y)$ を得る.
- (5.9) がなりたつこと: $\{n_k\}_{k=j,j+1,\dots} \stackrel{\text{def}}{=} \{n_k^{(k)}\}_{k=j,j+1,\dots} = \{n_k^{(j)}\}_{k=j,j+1,\dots}$ である. 任意の $y_j \in \mathbb{Q}$ に対し、 部分列をとっても極限が変わらないことより $\tilde{F}(y_j) \stackrel{\text{def}}{=} \lim_{k \to \infty} F_{n_k^{(j)}}(y_j) = \lim_{k \to \infty} F_{n_k}(y_j)$.

■124,-7($\lim_{x\to\infty}(F(x)-F(-x))=1$ がなりたつこと) F の任意の連続点 M>0 に対し以下の不等式がなりたつ:

$$\begin{split} \inf_{\alpha} \mu_{\alpha}(|x| \leq M) & \leq \inf_{\alpha_{n_k}} \mu_{\alpha_{n_k}}(|x| \leq M) \\ & = \inf_{\alpha_{n_k}} \left(F_{\alpha_{n_k}}(M) - F_{\alpha_{n_k}}(-M) \right) \\ & \leq \lim_{k \to \infty} \left(F_{\alpha_{n_k}}(M) - F_{\alpha_{n_k}}(-M) \right) \\ & = F(M) - F(-M). \end{split}$$

任意の $\epsilon>0$ をとる. 十分大きな連続点 M が選べて(F の不連続点は高々可算個だから可能),上述の不等式より $1-\epsilon \leq \inf_{\alpha} \mu_{\alpha}(|x| \leq M) \leq F(M) - F(-M)$ となるから $\lim_{x \to \infty} (F(x) - F(-x)) = 1$.

- ■128,11 ($F_{\mu}=F_{\tilde{\mu}}$ がなりたつこと) F_{μ} と $F_{\tilde{\mu}}$ の両方の連続点の集合を C とおく. 任意の $x\in\mathbb{R}$ をとる. 分布関数の不連続点は高々可算個だから, $\mathbb{R}\setminus C$ は高々可算, つまり C は \mathbb{R} 上稠密. F の右連続性とあわせて, x に右から近づく C の元からなる列 $\{c_n\}_{n\in\mathbb{N}}$ があって $F_{\mu}(x)=\lim_{n\to\infty}F_{\mu}(c_n)=\lim_{n\to\infty}F_{\tilde{\mu}}(c_n)=F_{\tilde{\mu}}(x)$.
- **■133,8(**H がエルミートであること) (Hz,z) > 0 特に (Hz,z) は実だから $(Hz,z) = \overline{(Hz,z)} = (z,Hz)$.

■134,6 (f(x) の式変形)

● 1 つ目の等号:

$$\begin{split} f(x) &= \frac{1}{2\pi} \int_{\mathbb{R}} e^{-i\xi x} \varphi(\xi) d\xi \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_{\mathbb{R}} e^{-i\xi x} \varphi(\xi) \lim_{R \to \infty} \mathbf{1}_{(-R,R)} \bigg(1 - \frac{|\xi|}{R} \bigg) d\xi \\ &= \lim_{R \to \infty} \frac{1}{2\pi} \int_{\mathbb{R}} e^{-i\xi x} \varphi(\xi) \mathbf{1}_{(-R,R)} \bigg(1 - \frac{|\xi|}{R} \bigg) d\xi \quad \text{Lebesgue } \mathcal{O}$$
収束定理.

- 2つ目の等号: 変数変換 $\xi \to \xi + \eta$ と Fubini の定理を用いる.
- $f(x) \ge 0$ となること: 千葉大, 種村氏のノート参照.

参考文献

- [1] 確率論, 舟木直久(朝倉書店, 2004)
- [2] ルベーグ積分入門, 伊藤清三(裳華房)